

『マディソン郡の橋』に於けるケルトの妖精物語

五島正夫

序

現在アメリカを初めとして、日本やその他の国々でベストセラーとなっている、ロバート・ジェームズ・ウォラー (Robert James Wallr) の『マディソン郡の橋』 (*The Bridges of Madison County* 1992) には、ただたんに塾年の男女の純愛物語としてかたづけられない何かがある。

小説のストーリーと主人公を簡単に述べると、プロ写真家ロバート・キンケイド52歳は『ナショナル・ジオグラフィック』の仕事をしている。5年間結婚して9年前に離婚。子供はない。両親もすでになく、遠い親戚とも音信はなく、親しい友人もない。もし、相棒とってよいなら古いシボレーのピックアップ・トラックのハリーがあるだけである。

一方マディソン郡の農夫の妻フランチェスカ・ジョンソン45歳は、イタリアのナポリ生れ、大学では比較文学専攻、アメリカ兵のリチャード・ジョンソンと結婚してアイオワ州にくる。高校生で17歳のマイケル、16歳のキャロラインの二人の子供が居る。この二人が主人公である。

1965年8月16日月曜日、キンケイドは『ナショナル・ジオグラフィック』の仕事でアイオワ州のマディソン郡にある屋根付きの七つの橋を撮影に行った。だが、七つめのローズマン・ブリッジがなかなか見つからなかった。

A mailbox was coming up, sitting at the end of a lane about one hundred yards long. The name on the box read "Richard Johnson, RR 2." He slowed down and turned up the lane, looking for guidance.

When he pulled into the yard, a woman was sitting on the front porch. It looked cool there, and she was drinkink something that looked even cooler. She came off the porch toward him. He stepped from the truck and looked at her looked closer, and then closer still. She was lovely, or had been at one time, or could be again. And immediately he began to feel the old clumsiness he always suffered around women to whom he was even faintly attracted.¹⁾

百メートルほどある私道の入口に郵便受けが立っていた。そこには「RR 2, リチャード・ジョンソン」とある。キンケイドは車のスピードを落とし、道を尋ねるために、その私道に入っていく。車を前庭に乗り入ると、玄関のポーチに女が座っていた。そこは、涼しそうで、その女は何か涼そうなものを飲んでいて。車を見るとポーチの所から腰をあげて、近づいてきた。彼はトラックを降りて、彼女を見た。そこから、改めて彼女を見、さらにしげしげと彼女をみた。彼女はきれいだった。それとも、かつてはきれいだったにちがいないと言うべきか。まだきれいになれるかもしれないと言うべきか。

これが二人の出会いであり、そしてローズマン・ブリッジまでの道案内をフランチェスカがかって出るところから二人の物語がはじまる。この時、夫と二人の子供はイリノイ州の農産物共進会で週末まで留守の時だった。キンケイドとフランチェスカがいっしょに過ごしたのは、出会いの月曜日の午後から金曜日の朝までの4日間だった。その後二人は一度も会ったことはないが、フランチェスカは死後に子供達に託した手紙に、

The paradox is this : If it hadn't been for Robert Kincaid, I'm not sure I could have stayed on the farm all these years. In four days, he gave me a lifetime, a universe, and made the separate parts of me into a whole. I have never stopped thinking of him, not for a moment. Even when he was not in my conscious mind, I could feel him somewhere, always he was there.²⁾

皮肉なのは、もしもロバート・キンケイドに出会わなかったら、私はその後ずっとこの農場に止まれたかどうかわからないということです。4日間で、彼はわたしに一生を、ひとつの宇宙を与え、ばらばらだったわたしの断片をひとつにしてくれました。それからというもの、たとえ一瞬でかにも、彼のことを考えないことはありませんでした。意識的に考えていないときでさえ、いつもどこ彼がいるのを感じていました。

と書いている。キンケイドは1982年死にその灰はローズマン・ブリッジに撒かれる。おってフランチェスカも1989年に死に、遺体は茶毘に付され、その灰もローズマン・ブリッジに撒かれるというものである。

この本が現代の人に共感を与える理由は様々であると思うが、本論文ではケルト的な面から、さらに進んで、この小説はケルト妖精物語そのものであることを論述したい。

ケ ル ト

この小説を読みながらもかんでくるのは、まずケルトというイメージである。主人公キンケイドとフランチェスカは共にW・B・イェーツ (William Butler Yeats, 1865—1939) の詩で結ばれていたと言ってもよいだろう。キンケイドの朗読する「月の銀のりんご／太陽の金のりんご」をフランチェスカが、それはイェーツの『さまよえるアングスの歌』 (The Song of Wandering Aengus) だと指摘する場面がある。これにキンケイドは

“Right. Good stuff, Yeats. Realism, economy, sensuousness, beauty, magic. Appeals to my Irish heritage.”³⁾

「そのとおり。いいね。イェーツは。リアリズム、無駄がなく、官能性、美しさ、魔力。アイルランドの血を引く私にのびたりなんですよ。」

と答えている。またキンケイドが車を運転していたとき浮かんだという

'The old dreams were good dreams; they didn't work out, but I'm glad I had them.'⁴⁾

「昔の夢はいい夢だった。かなわぬ夢ではあったけれど、夢を見られたのは幸せだった」

という文句も、夢のなかに生きるケルトそのものである。上記の二つの引用からも、「この小説の中にケルト的なものがありますよ」と言う作者のメッセージと受け取れる。

出 会 い

キンケイドからフランチェスカへの手紙には

It's clear to me now that I have been moving toward you and you toward me for a long time. Though neither of us was aware of the other before we met, there was a kind of mindless certainty humming blithely along beneath our ignorance that ensured we would come together. Like two solitary birds flying the great prairies by celestial reckoning, all of these years and lifetimes we have been moving toward one another.

The road is a strange place. Shuffling along, I looked up and you were there walking across the grass toward my truck on an August day. In retrospect, it seems inevitable—it could not have been any other way—a case of what I call the high lily of the improbable.

So here I am walking around with another person inside of me. Though I think I put it better the day we parted when I said there is a third person we have created from the two of us. And I am stalked now by that other entity.⁵⁾

今、はっきりわかります。長い間、わたしはあなたに向かって、あなたはわたしに向かって歩いてきたのです。会う前には、二人とも相手のことは知らなかった。けれども、私たちの無知の足下には、そんなことには気にもかけずに、勢いよくまわっていた必然性の歯車があり、わたしたちは出会わずにはいられなかった。星をたよりに大草原の上空を飛ぶ、二羽の孤独な小鳥のように、はるか昔から、この世に生まれる前から、わたしたちは互いに相手に向かって旅をしていたのです。

道路というのは不思議な場所です。八月のあの日、のろのろ走りまわって、ふと顔を上げると、そこにあなたがいた。そして、芝生を横切って、わたしのトラックに近づいてきました。いまから考てみると、そそは避けがたいことだったような気がします——わたしたちはあんなふうに出会わずにはいられなかった——ありそうもないことがじつはよく起こるのだという例のひとつでしょう。

わたしは、今、自分のなかにもうひとりの人間を抱えて、歩いています。と言うより、あなたと別れた日に言ったように、わたしたちがひとつになって、新しい人間が生まれたと言ったほうがいいのかも。そのもうひとりの人間が私から離れようとしないのです。

とキンケイドは書いている。一方フランチェスカも、

His eyes looked directly at her, and she felt something jump inside. The eyes, the voice, the face, the silver hair, the easy way he moved his body, old ways, disturbing ways, ways that draw you in. Ways that whisper to you in the final moment before sleep comes, when the barriers have fallen. Ways that rearrange the molecular space between male and female, regardless of species.

The generations must roll, and the ways whisper only of that single requirement, nothing more. The power is infinite, the design supremely elegant. The ways are unswerving, their goal is clear. The ways are simple, we have made them seem complicated. Francesca sensed this without knowing she was sensing it, sensed it at the level of her cells. And there began the thing that would change her forever.⁶⁾

彼に真っ直ぐ見詰められると、彼女の中で何かが跳ね上がった。その目、その声、その顔、その銀髪、軽やかな身のこなし、太古からのしぐさ、人の心を惑わせるしぐさ、ひとを惹きつけずにはおかないしぐさ、眠りに落ち込もうとする直前に、あらゆる防壁が取り払われた瞬間に、ひとにささやきかけてくるしぐさ。種をと問わず、雄と雌のあいだの分子の距離を変えてしまうしぐさ。

世代は移り変わっても、そのしぐさがささやきかけるものは変わらない。人間に必要なただひとつのもの。エネルギーは限りなく、意匠は優雅このうえない。けれども、しぐさは狙いを過たない。目指すところは明白だ。しぐさは単純明快だ。それを複雑なものにしてしまうのは、私たちなのだ。フランチェスカは自分が感じているとも知らずに、それを感じた。彼女の細胞がそれを感じた。そして、そこから、彼女を永久に変えてしまうなにかがはじまった。

と感じている。二人の出会いは太古から予定されていた静かな出会いと呼ぶようなものであった。

七つの屋根付きの橋

普通、妖精物語では道に迷い、いつの間にか人間界から妖精の国の入り口を通過してしまうという筋書きが多い。橋、川、トンネルはよく彼岸に通ずる道とも考えられている。ここでは、七つの屋根付きの橋がその役目を担っているように思える。ここではその橋に屋根が架かっているので、これはトンネルとも見なすことができよう。フランチェスカが橋にキンケイドを案内する場面を引用してみよう。

“They’re doing a piece on covered bridges, and Madison County, Iowa, apparently has some interesting ones. I’ve located six of them, but I guess there’s at least one more, and it’s supposed to be out in this direction.”

“It’s called Roseman Bridge,” said Francesca over the noise of the wind and tires and engine. Her voice sounded strange, as if it belonged to someone else, to a teenage girl leaning out of a window in Naples, looking for down city streets toward

the trains or out at the harbor and thinking of distant lovers yet to come.⁷⁾

「今度、屋根付きの橋を特集することになり、アイオワ州マデソン郡に面白い橋が幾つかあると聞いて来たんです。その内の六つまでは見付けたんですが、少なくとももう一つあるはずで、それがこの近らしいんです。」「ローズマン・ブリッジって名前よ。」フランチェスカは、風や、タイヤやエンジンの音の負けないように言った。なんだか他人の声みたいだった。ナポリの窓から身を乗り出している十代の娘、はるか街並を見下わして、遠くの列車や港を眺めながら、いつかやってくる遠くの恋人を夢見ている娘の声みたいだった。

と最後の橋「ローズマン・ブリッジ」を二人で見付けるところが大切なところである。

“It’s real nice, real pretty here,” he said, his voice reverberating inside the covered bridge.

Francesca nodded. “Yes, it is. We take these old bridges for granted around here and don’t think much about them.”⁸⁾

「とても素敵だ。ここはとても綺麗ですね」屋根付きの橋の内側で、彼の声がこだました。フランチェスカはうなずいた。「ええ、そうね。このあたりに住んでいるわたしたちは、こういう古い橋を見慣れていてふだんはなんとも思わないけど」

のようにふだん見慣れている者にはただの橋としか見えない。また、ローズマン・ブリッジと同様に象徴的役割をはたす、死ぬまで誰にも見せないでしまっておいた写真を撮ってもらった牧場についてもみてみよう。

Through the rain, from her place by the window, she could see the post where the old fence still circumscribed the pasture. When she rented out the land, after Richard died, she stipulated the pasture must be kept intact, left untouched, even though it was empty now and had turned to meadow grass.⁹⁾

彼女のいる窓辺から、雨を透かして、今でも牧草地を取り囲んでいる古い柵が見える。リチャードが死んで、土地を他人に貸すことにしたとき、彼女はその牧草地には手を加えないでほしいという条件をつけた。いまではそこは空っぽで、ただ草がぼうぼう生えているだけだったけれど。

上記の二つの場所は二人にとって特別な場所とあってよいだろう。ローズマン・ブリッジを含めた屋根付きの橋は人間界と妖精の世界の境界とも考えられる。七つの屋根付きの橋で囲まれた地域を即妖精の国とも考えられなくもないが、人も妖精も共存できるケルト的な薄明の世界と名付けられるであろう。

ケルトの薄明

イエーツの『ケルトの薄明』 (*The Celtic Twilight*, 1893) はイエーツのアイルランドの妖精など

に関する物語集である。また、このタイトルは、古代ケルト民族精神の復活を目的とする文化運動の総称である。ここでは、朝夕の昼とも夜とも区別の付かない時間帯と言う意味をも含めたい。主人公キンケイドは写真家で影の出ない朝夕の薄明の時間帯がとくに好きである。本分中でも

For a short time, red streaks cut across part of the sky. “I call that bounce,” Robert Kincaid said, pointing upward. “Most people put their camera away too soon. After the sun goes down, there’s often a period of really nice light and color in the sky, just for a few minutes, when the sun is below the horizon but bounces its light off the sky.”¹⁰⁾

ほんの束の間、何本かの赤い光の帯が空の片隅を横切った。「私はあれを<跳ね返し>と呼んでいる」と、空を指差して、ロバート・キンケイドは言った。「たいていの人にはカメラを早くしまい過ぎるんです。太陽が沈んだ後、ほんの数分のあいだ、空に本当に素晴らしいいろと光が現れることがある。地平線の下に沈んだ太陽をはねかえすんですよ」

というように仕事のほとんどがこの時間帯に集中している。この小説を読んだどの読者の心にも浮かび上がる。ジーンズにTシャツを着て、サンダルを履き、牧場のフェンスもたれて、髪を風になびかせたフランチェスカの写真も朝の薄明の時のものだ。

風

フランチェスカはキンケイドのことを

Francesca said nothing, wondering about a man to whom the difference between a pasture and a meadow seemed important, who got excited about sky color, who wrote a little poetry but not much fiction. Who played the guitar, who earned his living by images and carried his tools in knapsacks. Who seemed like the wind. And moved like it. Came from it, perhaps.¹¹⁾

フランチェスカはなにも言わなかった。ただ、黙って考えていた。草地と牧草地の違いが重要だと考え、空の色に興奮し、少し詩をかくけれど、フィクションはあまり書かない男のことを。ギターを弾き、写真で生計を立て、機材をナップザックに入れて持ち歩いている男のことを。まるで風見たいな男、風のように動く男、多分、風から生まれた男のことを。

と言っている。ケルトの話すゲール語 (Gaelic) は風 (gale) という意味があるので「風から生まれた男」は文字どおりケルトの男とも解釈できる。キンケイドに出会ったその夕方フランチェスカがつける新しい香水の名前が「風の歌」と言うのもただの偶然とは思えない。

古代の夕べとはるかな音楽に

キンケイドとフランチェスカの求めるものは自分たちルーツであり、さらに人間の生まれた太古の人間性なのかもしれない。

And he heard the words he whispered to her, as if a voice other than his own have saying them. Fragments of a Rilke poem, “around the ancient tower … I were been circling for a thousand years.” The lines to a Navajo sun chant. He whispered to her of the visions she brought to him—of blowing sand and magenta winds and brown pelicans riding the backs of dolphins moving north along the coast of Africa.¹²⁾

自分が彼女にささやく言葉が聞こえたが、だれかほかの人間が話しているかのようだった。リルケの詩の断片。「古代の塔のまわりを……わたしは千年のあいだ歩きまわっていた」ナヴァホ族の太陽の歌の一節。ロバートは彼女がもたらした数々のイメージを言葉にしつづけた——吹きすさぶ砂、赤紫色の風、茶色のペリカンを背にのせて、アフリカの海岸ぞいを北上するイルカたち。

Some-where it played, he could hear it, an old accordion. It was far back, or far ahead, he couldn't be sure. Yet it moved toward him steadily.¹³⁾

どこかで演奏する古いアコーディオンの音が聞こえてくる。それがはるか昔の音なのか、はるか未来から響いてくるのかはわからない。けれども、それは徐々に近づいてきた。

上記の謎めいた引用はこの小説全体に流れる「枯葉」のリズムを背景にして、詩と音楽の気分に浸りながら読者をも過去へ過去へと、また未来へ未来へと連れ去られるような気にさせる。

魔 法

遠くから、はるか遠くから、別の世界からやってきた男、キンケイドのことをフランチェスカは、

Robert Kincaid was a magician of sorts, who lived within himself in strange, almost threatening places.¹⁴⁾

ロバート・キンケイドには、どこか魔法使いみたいなのところがあった。不思議な、ほとんど不気味な場所に、ひとりひきこもって暮らしているような雰囲気があった。

と述べている。また黒人ジャズ・ミュージシャンのジョン・「ナイトホーク」カミングズというテナー・サクソ奏者は、

He understood magic.¹⁵⁾

あの男は魔術的な力ってものを理解していた。

と語っている。まさに本文中でも言及のあるとうり、実際には書かれなかった『図説 シャーマンの歴史』という本から抜け出してきたかのようである。

結 語

以上考察してきたようにケルト的な描写が多く出てくる。いや、この『マディソン郡の橋』全体がケルトそのものと言ってよいであろう。この小説はケルトの妖精物語に源を置く大人の妖精物語である。妖精の国への入り口は七つの屋根付の橋であり、最後のローズマン・ブリッジは二人でこの世に生あるときには渡れなかつた。だが、ロバートが死に火葬され、その灰は遺産管理人によってローズマン・ブリッジに撒かれ、七年後にフランチェスカの灰もローズマンブリッジに撒かれた。このことにより二人は妖精の国（愛の国）へと、おんぼろピックアップのハリーで乗り入れ、妖精の国をのろのろ走り、旅していると言えないだろうか。あるいは、二人でローズマン・ブリッジを見つけた時点で、七つの橋を渡り二人だけの妖精の国に入っていたとも言えよう。アイルランドの血を引くこの小説の著者は『ケルトの薄明』に因んで、アメリカにケルトの妖精の国を築こうとしているのかもしれない。

“Analysis destroys wholes. Some things, magic things, are meant to stay whole. If you look at their pieces, they go away.¹⁶⁾

「分析は全体をだいなしにする。ある種のものは、魔術的なものは、全体として見なければならぬ。個々の断片を見れば、それは消えてしまうんだ」

はこの小説の主人公ロバート・キンケイドの持論だが、その様にならないことを祈り筆を置く。

N o t e s

- 1) Robert James Waller, *The Bridges of Madison County*, (London : Mandarin Paperbacks, 1993) pp. 15-16.
- 2) *Ibid*, p. 154.
- 3) *Ibid*, p. 59.
- 4) *Ibid*, p. 42.
- 5) *Ibid*, pp. 22-23.
- 6) *Ibid*, pp. 28-29.
- 7) *Ibid*, p. 31.
- 8) *Ibid*, p. 36.
- 9) *Ibid*, p. 24.
- 10) *Ibid*, p. 59.
- 11) *Ibid*, p. 59.
- 12) *Ibid*, p. 108.
- 13) *Ibid*, p. 97.
- 14) *Ibid*, p. 27.
- 15) *Ibid*, p. 166.
- 16) *Ibid*, p. 39.

* 訳は村松潔訳『マディソン郡の橋』（東京：文藝春秋、1994年）をもちいた。